

設計者



内田 祥哉



高橋 誠一

2人は通信省の同僚で、同年に退職。当時の佐賀県知事が、国立国会図書館の設計コンペで入選し、夫人が佐賀県出身だった内田さんに目を留め、佐賀県立図書館の設計を打診。内田さんが高橋さんに声をかけて共同設計となった。独立したばかりの若き建築家2人にとって初の公共建築。2人は本作の他、「佐賀県立博物館」「佐賀県青年の家」の計3作を共同設計した。

佐賀県立図書館について 2人が選んだ言葉

1961年 独立して間もなく、内田から電話。「テイちゃんは仕事ないだろう」「ないよ」「佐賀でこういう仕事があるんだけど、一緒にやらない？」「もちろん」（高橋誠一）

「プランはふたりで一所懸命考えましたよ。図書館の人も、これが壊されないのは使い勝手がいいからだと言ってくれる」（内田祥哉）



佐賀県立図書館の図面の上部。高橋さんが含む「第一工房」の名で作成され、内田さんが押印しているのがわかる（提供：佐賀県立図書館）

2人が共同設計した2作品



内田祥哉さんと佐賀県の縁はその後も続き、内田祥哉さんはさらに、有田町に「有田町歴史民俗資料館（1978年）」、「佐賀県立九州陶磁文化館（1980年）」、「有田焼参考館（1983年）」の3作品を設計しています

発行：熊本ビル部 Shiori Nishimoto

2023年4月発行
https://www.facebook.com/kumamotobill/

参考資料*「内田祥哉は語る」、「高橋誠一／第一工房」、「建築」第16号、「建築文化」ほか

佐賀県立図書館（2025.3）

〒840-0041 佐賀市内二丁目1-41
TEL 0952-24-2900

*休館日・開館時間はWEBで確認を
https://www.tosyo-saga.jp/



佐賀県立図書館の歴史についてはコチラ



佐賀県立図書館

1962年

内田祥哉 + 高橋誠一(第一工房)

佐賀県立図書館 1962



佐賀城公園の一角にある佐賀県立図書館は、今から60年前の1962年に竣工。設計者に東京大学助教授だった内田祥哉（よしちか）さんと、武蔵工業大学教授だった高橋誠一（ていいち）さんを迎え、「佐賀には稀な、あかめけしたりばな建築にしよう」と意図して（当時の池田県知事の言葉）でできあがったものです。内田さんの「図書館のような複合的な機能をもつものは、平屋もしくは二階建てであるべき」との持論により二階建てと低層に抑え、中2階を設けて最大限の床面積が確保された建物は、水平方向のラインが強調された外観。コンクリート打ち放しのバルコニーや梁が印象的な、「県民に親しみやすい建物になるように」という願いから、有田焼のタイルも多用されています。

開館当時は戦後の図書館のあり方が問われていた時期で、モデルとなる図書館も少ない中、設計者の2人が毎週東京から飛行機に乗って佐賀に来て、近くの旅館に泊まり込みながら、「泥んこになって」プランを考えたそう。その想いと熱意が「使い勝手のいい図書館」として結実し、開館から60年経った現在も図書館として使われている、稀有な建物です。特に「書庫不足」は深刻な課題ですが、書庫を隣地に新設したり（1989年）、開館当初に設けられた300人収容の講堂を書庫に転用したり、10km以上も離れた県有施設を書庫として使用するなど数多の工夫を重ねながらこまめに建物の維持改修を行い、図書館として使い続けようと尽力されています。

竣工時と用途が変わった部屋

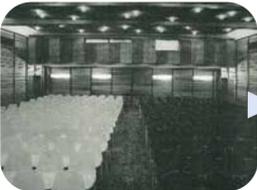
ほか、食堂が「みんなの森」に、新聞閲覧室が会議室に変更

1階
会議室
→事務室



当初は「図書館を維持管理する職員に、南側の一番日当たりのいい場所で仕事をしてもらおうべき」という考えから一階南側に事務室があったが、「一番いい場所は県民に開放すべき」との意見を踏まえ、県民向けオープンスペース（現在は「こころざしの森」）に改修された。事務室は、会議室であった北側を改修して移設。天井と照明が個性的

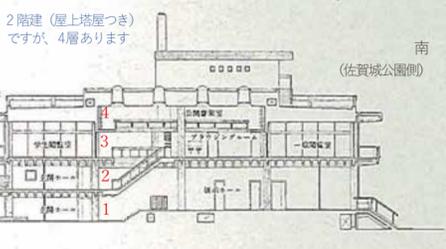
1階
講堂
→書庫



竣工時、佐賀市には集会施設がなかったため、その役割をも図書館に求められ、300人収容の講堂が設けられたが、その後の佐賀市文化会館の開館等に伴い、深刻であった書庫不足を解消するため、書庫に改修された。上部に残る映写室の壁と窓に、その名残をみることができる。書庫不足は今なお大きな課題だが、60年前の図書館が使われ続けているだけすごいです

西側からの断面図

(南北方向)



2階建（屋上塔屋つき）ですが、4層あります

南（佐賀城公園側）

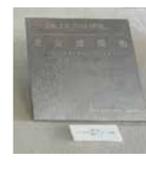
北（読書側）



北西側からみた写真

佐賀県立図書館は2021年、258番目のDOCOMOMO選定建築物（日本におけるモダンムーブメントの建築）になりました

【評価】竣工から60年を経、県民のニーズや時代の変化、書庫不足解消のための一部の用途変更・改修は行われているものの、施主である佐賀県のみ細かなメンテナンスも功を奏し、竣工当時の意匠を多分に残したまま県立図書館として使われ続けている。戦後、公立図書館のあり方を模索していた時代の雰囲気の色濃く漂わせている、図書館建築の完成形の一つといえる名作。



佐賀県立図書館は2021年、258番目のDOCOMOMO選定建築物（日本におけるモダンムーブメントの建築）になりました

佐賀県立図書館 1962



左 佐賀城公園との連続性を保つため、北側にも玄関を設けられた。中2階から館内に入ることになる。玉石と有田焼タイルの床は、外から玄関ホールまで繋がっている



二分割の2階

右 2階は、四面の壁が2層に区切られ、その上に閲覧室が設けられている。低層でも多くの面積を確保するための工夫。中央部が吹き抜けのような様相を呈しており、階段を上がると高くなる天井に驚く



2階閲覧室

吹抜けになっている2階を見下ろす手摺は、本を置いて閲覧する前提で設計された（現在は禁止）。大きなトップライトのお陰で、低い天井でも圧迫感を感じない。手摺の欄干の張地は、京都の高級織地店「龍村」が再現した正倉院の女仏の模様を、化繊で織って貼ったものとのこと

1階展示ホール



1 有田焼タイルと玉石を組み合わせた、外部から続く床タイル。「展示ホール」の機能を果たす掲示板を立てるポールの差込口もある

2 天井を横断するコンクリートの梁の美しい仕上がりにも注目

3 壁に取り付けられている四角いものは照明。今も点灯可能。壁は「はつり仕上げ」。手摺がかるリッチな仕上げ（内田祥哉さんの言葉より）



4 木製の建具も鑑賞対象。館全体のミッドセンチュリーな味は、この建具が醸し出している

隠れた見どころ



左

【音図は立入禁止】屋上の塔屋の片持階段（階段を片方の壁だけで支えている階段）。ステンレスの手摺のデザインも凝っている。

右 マイナスねじで留められた蝶番。プラスねじが普及したのは1970年代に入ってから。マイナスのねじが使われていることで、この扉が竣工時のままであることが窺える



階段のこと

廻り階段（2階）



2階と閲覧室を繋ぐ「廻り階段」は当時の日本では珍しかったため、この建物の中で見て欲しいと設計された。踏み段は有田焼のタイルを張り合わせて作られたもの。館内のタイルのデザインは主に高橋誠一さん。内田祥哉さんいわく「得意中の得意」だそう。手摺が描く美しい曲線にも見とれる

中央階段の手摺



1階から2階までを繋ぐ中央階段の手摺は、内田祥哉さんのデザイン。握りやすさと安全性を確保。年月を経て色合いのいい風味に。現在は、欄干部分に木の転写防止板が貼られている

素敵なバックヤード



事務室裏にある屋上につながる階段。音図は立入禁止ですが来目にも触れるところではないのに、その手摺は角丸にそり抜かれ、上面には釉薬たっぷりのチョコレート色のタイルが張られています

踊り場にある「消火栓」のフロントもかわいい



有田焼のタイルのこと

佐賀県立図書館は、県民に親しみやすい施設となるよう、佐賀の特産品・有田焼のタイルが多用されました。タイル製作を手掛けたのは「岩尾磁器工業（現岩尾エンジニアリング）」。

このたび佐賀県立図書館が同社に聞き取りを行い、タイルについてのコメント（ピンク色文字部分）をいただいておりますので併せてご紹介します。



01 東側外壁面のタイル。コンクリート打ち放しの壁面とひと際存在感をもち、自然と調和



02 西側外部にあるスロープの手すり。手が触れる面に張られているのは上等の釉薬のあるタイル



03 児童閲覧室入口の三角形を組み合わせたタイル。土台に凹凸を付けられている



04 内部と外部が同じ仕上げになっている床。左右の手摺壁の角丸枠に並ぶのも、有田焼タイル



05 玉石敷きの床に、基盤の目柱に有田焼タイルのラインが施されている



06 バックヤードの階段の手摺にも、釉薬のあるチョコレート色タイルが。人通りの少ない場所での凝った意匠に、設計者の熱意が見える



07 中2階のトイレ前の壁。壁々にポイントとして、赤や青の「ギヤマン（ガラス）」のタイルを配置



08 中2階会議室（竣工時は新聞閲覧室）の壁壁の間に、黒くつやつや光る瓦のようなタイル



09 閲覧室の壁タイルは、布地を押し付けて織物質感を出す、とても珍しい技法だそう



10 内部と外部が同じ仕上げになっている床。左右に並ぶのも有田焼タイル



10 内部と外部が同じ仕上げになっている床。左右に並ぶのも有田焼タイル